

## 近藤啓吾著 『山崎闇斎の研究』

牛尾, 弘孝  
大分大学

<https://doi.org/10.15017/18105>

---

出版情報：中国哲学論集. 13, pp.93-107, 1987-10-25. 九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

近藤啓吾著『山崎闇齋の研究』

牛尾弘孝

近年、伊藤仁斎や荻生徂徠等の研究の隆盛に比して、等閑視されがちであった崎門学の研究は、本書によって書誌学的な面においても、思想的な面においても、着実な進展の基盤を与えられることとなった。全篇を通じて詳細な論究がなされているので、内容の要約は必ずしも容易なことではないが、評者なりの理解に即して、以下各篇ごとに紹介していきたい(原稿枚数の都合上、第二部は省略させていただいた)。

—

先ず本書の目次をあげると左記の如くである(便宜上、通し番号を附した)。

序

緒説——本書の論点——

第一部

- (一) 『關異』と『周子書』
- (二) 『白鹿洞書院掲示』の表章
- (三) 『大家商量集』編纂の目的とその成立
- (四) 『近思錄集解』と『西銘解』の点刊
- (五) 『西銘』と崎門学

- (六) 敬説の転回
  - (七) 『語録辞義』の発見
  - (八) 『玉講附録』の成立とその意義
  - (九) 山崎闇齋と保科正之
  - (一〇) 嘉点『論語集註』の研究  
易学と山崎闇齋
  - (一一) 『神代卷記録』の改変
  - (一二) 『神代卷記録』に見える「伝」について
  - (一三) 心神考——三輪大神と山崎闇齋——
  - (一四) 『垂加草』の開板
  - (一五) 『風葉集』の完成と若林強齋
- 第二部
- (一) 闇齋先生の風格——浅見綱齋の記録より——
  - (二) 野中兼山の母 秋田夫人の碑
  - (三) 楠本碩水
  - (四) 平泉博士と山崎闇齋
  - (五) 山崎闇齋先生墓所修理および山崎闇齋先生三百年祭について
- 年譜
- 索引
- 跋

二 緒説——本書の論点

副題に、本書の論点と記してあるように、著者が本書を通じて何を明らかにしようとしたかを、六節に分けて述べたものである。それは闡齋の実像を究明するという一事にはかならない。

闡齋の学は禅・朱子学・神道と三変している。この激烈な思想遍歴の真意は、生前において佐藤直方・浅見綱齋等の高弟達にさえも理解されず、没後はその人物・学問について、つとに伝説化権威化がおこなわれ、孫弟子あたりともなるとすでに強固な偶像ができあがっていた。たとえば、直方の高弟・稻葉迂齋の子である黙齋の著書『先達遺事』において伝説化された「門弟六千人」の呼称は、その顕緒な例といえる。闡齋の研究はこのような伝説を批判し、闡齋の虚像を打ち破ることより着手しなければならず、そのためには虚像が構成される以前の真実の資料を捜しださねばならない。そのことが不十分なために、近年における学界の動行を見ても、かえって新たな虚像を構成しつつある。たとえば、相良亨氏の、闡齋はほとんど窮理を説かずただ持敬のみを問題としたという説、平重遠氏の、闡齋は晩年にみずからの神道において秘伝を設けたという説、阿部吉雄氏の、李退溪学説の闡齋への影響を過大視する説、それらはいずれも闡齋の著書・編書・講義録等への厳密な書誌学的調査が不十分なうえに、その遺著のすべてにわたって精読していないことから来る謬説にほかならない。そのうえさらに闡齋の人物と学問を理解するのに困難なことは、その学説がしばしば変化しているように見えることである。しかしその変化してやまない底に、終始一貫して変らぬものがあつたのではないか。すなわち闡齋の生涯を通じて変らぬものは、その孝子であつたことである。孝こそ闡齋の本質なのである。仏者として禅寺にあつたときも孝子であり、儒に帰したときも、神道に帰したときも孝子であつた。闡齋の苦悩も転回も、この孝子たることから生じたのであり、その倫理（朱子学）も信仰（垂加神道）も、皇室論も歴史観も、孝子たる本質を理解しなければ正しく把握することはできないといつてよい。

## 第一部

### (一) 『關異』と『周子書』

『關異』は正保四年の春、闡齋が三十歳のときに成つた編纂書である。二程子や薛敬軒等の書からの引用もあるが、主として『朱子文集』・『朱子語類』の中より、朱子の仏教批判（とりわけ禅批判）の語を抄録し、最後に闡齋自身の後記を附している。藤原惺窩・林羅山等の江戸初期の学者は、明代に著わされた『四書大全』・『四書蒙引』等か

らの孫引きによっているが、闇齋の『闢異』においてはじめて直接に原典から引用し、それにもとづいて立言するという学問の正道が樹立されたのである。闇齋がこの書を編纂した目的は、かつて家を捨て親を捨てて禅林に入ったことに對する苦悩と懺悔からくるものであり、人のよって立つべき倫理の綱常を朱子の説によって、理論的にも体験的にも深く是認したからにはかならない。

『周子書』は同じく正保四年の五月に成った編纂書で、周濂溪の「太極図」・「太極図說」・「通書」をいづれも朱子の註とともにのせ、あわせて濂溪の遺文等をも収め、それらに関する朱子の語を『朱子文集』の中より採録し、最後に闇齋自身の跋文を附している。闇齋がこの書を編纂した目的は、『闢異』によって自覚された倫理の綱常の由ってきたる本源を、濂溪や朱子の「理」の哲学によって説明し、三綱五常を普遍的なものとしてとらえることにあった。その意味において闇齋は、『周子書』を『闢異』と切り離すことができぬ一体不可分のものとして考えていたに違いないのである。

### (二) 『白鹿洞書院揭示』の表章

慶安三年の十二月、闇齋三十三歳のときに、『朱子文集』卷七十四より採録した「白鹿洞書院揭示」に註解を加えて加點刊行した表章書が、『白鹿洞学規集註』である。なぜ闇齋が「書院揭示」とせずに「学規」としたかというところ、李退溪の影響によるものであったが、後年これを改めて『白鹿洞書院揭示』（ただし註解は除かず）としている。この表章書の目的は、父子の親・君臣の義・夫婦の別・長幼の序・朋友の信、いわゆる五倫を学ぶことを教えたもので、闇齋が禅林生活において、父母を慕う恩愛の情を絶つことができなかつた苦悩を十分に推察せしめるものがある。本書を講説したものに、高弟浅見綱齋の『白鹿洞書院揭示師』がある。

### (三) 『大家商量集』編纂の目的とその成立

『大家商量集』は承応元年より同三年の間、闇齋が三十五歳より三十七歳の間に成立したと推定される編纂書である。『闢異』において禅を批判した闇齋は、この書によって朱子の論敵陸象山兄弟の学を批判し、朱陸の差異を明らかにしようとした。本書は初めに闇齋の自序があり、末に「答真辺仲庵書」二篇を附し、本文はすべて『朱子文集』・『朱子語類』からの抄録である。闇齋が陸象山の学問を批判した理由は二つある。一つは陸学が読書窮理の努力を欠

き、自己の心のみを過信するあまり、儒者でありながら倫理綱常を書してそれを自覚しないこと、そこに闡斎は禅の影響を見たのである。一つは近世朱子学の祖とよばれる藤原惺窩が、陸学を許容するという折衷的態度を有していたことである。本書を講義したものに浅見綱齋およびその高弟若林強齋の『大家商量集師説』がそれぞれにある。

(四) 『近思録集解』と『西銘解』の点刊

寛文十年の五月、闡斎が五十三歳のときに、無註本『近思録』の校訂が成った。これは葉菜の加註した『近思録集解』からその註を削り、朱子の原本に訓点を附したものである。それは闡斎が朱子の真精神を究明するために、通行本の煩瑣を退けて朱子の原書の姿に復元することを志したからにほかならなかった。ところが闡斎はこれ以前に実は葉菜の『近思録集解』を加点刊行していたのだが、以上のような理由から、これを悔いてその絶板を望み、そのため門流も『集解』を用いなくなつたので、いつしか闡斎がそれに加点したという事実も忘れられ、どの本がそれであるかわからなくなつてしまつた。その一つが加点者の名を記していない『近思録集解』(寛文十三年、吉野屋権兵衛刊本)と推定され得る。

同じく闡斎が加点刊行したことを忘れられてしまつたものに、『西銘解』がある。江戸初期において一般に読むことができた張横渠の『西銘』は、『性理大全』所収のものであつて、それは朱子の『解』のほかに、『朱子語類』のみならず楊龜山・張南軒・陳北溪等の言を広く集めて『解』を補つており、すこぶる煩雜なることを免れない。闡斎はそれら諸家の言をすべて削り、朱子の『西銘解』の復言を試みたのである。

(五) 『西銘』と崎門学——その垂加神道への投影——

闡斎の表章書『西銘解』は、三十八歳前後ごろに刊行されたものと思われる。その際に李退溪の『西銘考証講義』に触発されるところが大きかつたのは事実であるが、その説に盲従することなく、採るべきは採り、採るべからざるは退けている。闡斎が『西銘』を尊重した理由は、天地即父母、父母即吾として、そこに一貫して流れる「いのち」の存在を、観念的ではなく自分自身のこととして体認したからである。この態度は綱齋——強齋と繼承され、とりわけ闡斎と強齋はこの『西銘』に神道の本質を見た。強齋所講の『西銘師説』は、闡斎の真意を深く理解したものである。

## (六) 敬説の転回

朱子は窮理と持敬とが車の両輪、鳥の両翼の如きものであって、その一つを廢することはできないとした。慶安四年、闇齋は三十四歳のときに表章書『敬齋歳分註附録』を編纂し、敬の意義を明らかにすることに務めたが、さらに推敲を重ね、実際に刊行したのは明暦元年、闇齋三十八歳のときであった。これは朱子の「敬齋箴」を『朱子文集』巻八十五より採録して加訓加註し、さらに朱子・黄勉齋等の、同箴について述べた語を附録としたものである。朱子の敬説は我が身に内在する理への畏敬であったが、闇齋は伊勢・吉田神道の相伝を受けることにより、神を主体とし、我が外なる天神への崇敬であると同時に、我が内なる天神（すなわち心神）への畏敬であるという自覚が生じることとなった。このような敬説の転回は、闇齋の儒学の上にも変化を促すことになり、寛文十二年、闇齋が五十四歳のときに成った『中和集説』・『性論明備録』、およびそれと前後して編せられたと考えられる『冲漠無朕説』を見ると、闇齋の思索の対象が、これまでの倫理綱常の確立を目標とするものから、「心」の実体の究明に重きを置くようになったことがわかる。

## (七) 『語録辞義』の発見

従来闇齋が『朱子語類』をはじめ、諸書のうちから俗語に関係のある個所を抄録して一書となしたものの存否は未詳とされていた。しかし幸いにも内閣文庫蔵『語録解義』写本二部を調査することにより、『語録解義』そのものは林羅山の所編になるものであるが、『語録解義』中に収められているわずか十三条の『語録辞義』と題する節記が、「右山崎氏撰之」という後記によって、闇齋の所撰であることが判明した。闇齋が俗語に注目その解説に努力したのは、朱子の思想を正しく把握するために、『朱子語類』の読解が必要であると考えたからである。闇齋のこのような俗語研究は門流にも大きな影響を与え、今日にも有意義な書である留守希齋（三宅尚齋の弟子）の『語録訳義』を生むに至った。

## (八) 『玉山附録』の成立とその意義

『玉山講義附録』は保科正之が編纂したもので、そのことは正之の年譜『土津霊神事実』の寛文五年（五十五歳）の項に、「（九月）九日、『玉講附録』成る」と記されていることから知ることができる。本書の体裁は、『朱子文集』

卷七十二より「玉山講義」を採録し、それに『朱子文集』・『朱子語類』より抄録した仁義礼智等の朱子の説を附したものである。その際に留意すべきは本書の編纂の仕方である。一つは『朱子語類』からの引用が百九十五条、『朱子文集』からの引用が六十四条、すなわちほとんど前者からの抄録によって成り立っており、巻数まで厳密に記載されていることである。一つは大極・性・仁義礼智信等に関する論旨明快の語が整理よく収められていることである。この当時これほどの学力を有しているものは闇斎をおいてはほかになく、さらに同じ年の寛文五年の三月に、正之は闇斎を賓師として招聘している事実からして、本書の編集の任に闇斎が主として当ったことは疑うことができない。今日にでも容易に見ることが出来る流布本『玉講附録』(寿文堂刊本)には、「山崎嘉跋」の四字を加えた後記が附してある。これは闇斎の長逝後、書肆が勝手に加えて、購読者の意を引こうとしたためであると推定される。

(九) 山崎闇斎と保科正之

秀忠の庶子として生まれた保科正之は、家光の遺命により、年少の家綱の後見役となり、徳川幕府の文治政治確立に絶对的な政治力を發揮したが、彼は本質的に求道者であった。若き日には兵書を愛読し、ついで老仏に心を寄せたが、四十二歳のときに始めて朱子の『小学』を読み、その倫理の厳肅さに深く感銘して、朱子学に転ずることとなった。しかし彼は儒字のみでは満足できず、五十一歳のときに吉川惟足について吉田神道の説を聞くに至った。正之は五十五歳のときに闇斎(四十八歳)を招聘して、『論語』・『近思録』等の講義をさせるとともに、『玉山講義附録』等のいわゆる会津三部書、ないし五部書の編集にも従事させた。闇斎は正之に招聘される以前から神道に深い関心を持っていたが、正之の影響もあって、寛文十一年の冬、正之(六十一歳)が吉川惟足より吉田神道の伝を受けると同時に、闇斎も惟足より伝を受けて、その思想は大きく飛躍したのである。しかし闇斎は神道の傾斜を深めれば深めるほど、傲然として権力の座を占め、朝廷を抑圧する徳川氏への批判を持つようになり、あわせて正之の神道尊崇の限界を見抜くに至ったのである。そのこともあって正之が没した翌年の延宝元年、闇斎は正之の葬儀に参列したあと、長逝するまでの十年間、京都を離れず、二度と東遊することはなかった。

(一〇) 嘉点『論語集註』の研究

闇斎の嘉点『四書集註』の刊行は、初刻が寛文十年頃に出され、その定本ともいべき現行本の完成は延宝四年頃



と推定される。『四書』は平安朝以来おこなわれてきた古訓が、江戸初期まで厳然として伝えられており、林羅山加訓の道春点『四書集註』は、古訓を保存しようと努力していることがうかがわれる。闇斎の嘉点『四書集註』の特色は、実にこの古訓を脱却して、漢文としてふさわしい簡潔で明快な和訓を施していることにある。さらに注目すべきは経廠本『四書』を底本とし、それも安易無批判にそれに依拠しているのではなく、諸本と厳重な校合をし、従うべきと従うべからざるを明確にしたうえで、それを用いていることである。のちに松平定信が寛政異学の禁を出してからは、崎門系の学者が儒官として登庸されることになり、嘉点『四書集註』が盛行するようになった。

### (一) 易学と山崎闇斎

闇斎の学問的態度は厳正であって、『四書大全』・『四書蒙引』等からの孫引きを排し、直接に『朱子文集』・『朱子語類』に遡って引用していること、朱子の真精神を究明するために、通行本の煩瑣を退けて朱子の原書の姿に復元することを志し、『近思錄』や『四書集註』等を加点刊行したことがそうである。これは『易』に対しても同様であり、延宝三年(五十八歳)三月、『易経本義』加訓刊行、同五年初夏、『朱易衍義』編纂刊行、同五年孟夏、『易学啓蒙』改訂刊行、同六年孟春、『著卦考誤』表章刊行ということからもわかるように、晩年の十年間における易学研究の成果は注目すべきものがある。その大きな特徴を三つあげると、第一は、当時一般におこなわれていた、『易』の経文(本文)に十翼のうちの彖伝・象伝・文言伝を移置した体裁、すなわち『周易伝義』や『易経大全』の体裁を斥け、経文と十翼とを分けて、朱子の原輯(『易経本義』)に復元していることである。第二は、朱子の易註なる『易経本義』の真髓を「潔静精微」(もともと『礼記』経解篇の語、『朱子語類』卷六十七、易三に詳しい)に見て取ったことがある。潔静精微とは、『易』を読むには私見・作意を持ってはならぬこと。第三は、闇斎の常言であったという「易ハ唐ノ神代卷、神代卷ハ日本ノ易ヂヤ」(『強齋先生雜語筆記』卷一)という語からもわかるように、闇斎にとって易の研究が、そのまま『日本書紀・神代卷』の研究につながるものであったことである。

### (二) 『神代卷記録』の改変

闇斎の『神代卷記録』(『神代記垂加翁講義』ともいう)は、『日本書紀・神代卷』の講義を高弟浅見綱斎が筆録したものである。本講義の眼目は、大己貴神(おおあなむちのかみ)の出処進退の潔さに、利害功名の心をすべて投げ

捨て、ひたすらにわが心は神の賜物であることを確信しようとする神道の根本義を見たことである。このような闍斎の神道説（垂加神道）を純粹に継承したのが、綱斎の高弟若林強齋であった。その強齋と同世代であって、闍斎の神道の方の高弟正親町公通と出雲路信直とに学んで、京における垂加神道の中心人物となったのが玉木正英（号は葦齋）であった。正英は強齋が書写していた闍斎所講、綱斎筆録の『神代巻記録』を強齋との交際が生じた機会に借りうけてさらに書写したのであるが、その正英書写本は『山崎闍斎全集』に収録されており、容易に見ることができ（岩波思想大系三十九『近世神道論・前期国学』所収の、闍斎「神代巻講義」も、この『山崎闍斎全集』から採録したものである）。ところがこの流布本『神代巻講義』は、原書本『神代巻記録』（『神道大系』論説編十二、垂加神道（上）に所収）と比べてみると、字句に出入異同があるのみならず、講義の内容が全く逆になっている箇所が少なからず発見される。これは正英がある意図を持って、故意に闍斎の講義を書き改めたということにほかならないのである。その理由の一つは、正英が『神代巻藻塩草』（森井左京原著、玉木正英加筆）の文章と一致させ、自説の正統化を図ろうとして改変したこと、もう一つの理由は、正英が整理編纂した闍斎の垂加神道の諸伝集『玉籤集』を權威づける必要から、もともと神道への開眼を期待して綱斎個人に講じた『神代巻記録』を、初学入門者に対しておこなわれたものとして位置づけ、この位置づけに相応すべく改変したことである。その結果、本書の内容は個性を失い、平板化されたものになってしまった。このように闍斎没後、垂加神道は形骸化の一途をたどっていたのだが、強齋こそは闍斎に復帰し、これを正しく継承しようとした唯一の人であったといえる。

③ 『神代巻記録』に見える「伝」について

伊勢神道、吉田神道、忌部神道等、神道各派はそれぞれの「伝」を持っている。「伝」とは、『神代巻』の記述（経文に寓せられている道理を説明した語（解釈）のことである。闍斎は謙虚に各派の「伝」を集め、自主的に判断してその採るべきを採ったが、みだりに私見新説を立てることはしなかったし、またこれを秘伝として独占することもなかった。たとえば「神籬（ひもろぎ）・磐境（いわさか）」の伝は、吉田神道における「唯授一人」とする最高の秘伝であり、吉田神道の道統を継承した吉川惟足より保科正之に相伝し、正之より闍斎に相伝するという形式が取られた。この「伝」の内容は、要するに神への敬しみの念を体認することを教えるものである。それは観念的に理解するので

はなく、ちょうど神前に出たとき、おのずからに嚴肅の念を生じるが如く体認するのである。以上のことから、平重遠氏が『近世日本思想史研究』(吉川弘文館)の中において、「闇齋はみずから秘伝を設定し、これによって伝授することとした」というような事実は全く存在せず、そのような説は、玉木正英が『玉籤集』の中で区分した闇齋の垂加神道の「伝」の位置づけをそのまま是認することからおこった誤りにすぎない。

#### 四 心神考——三輪大神と山崎闇齋——

奈良県桜井市にある三輪神社(大神神社)は、大己貴命(おおあなむちのみこと)の奇魂(くしみたま)と幸魂(さきみたま)の二つの魂を奉祀する神社で、三輪山(三諸山)そのものが神体であり本殿ともなっている。事の由来は『日本神紀・神代卷』にあつて、大己貴命(大国主命ともいう)は、はじめ国土平治の功績を自負し、天下を治め得るのは自分一人だと考えていたが、それを諭す二つの魂の出現により、自己の非を痛切に悔いたのである。功績を自負する大己貴命は邪心の宿った大己貴命であり、それを諭す二つの魂は身心清浄の大己貴命である。このような自問自答を通して深く自覚した命は、経津主神・武甕槌神の二神より、国土をその正統の統治者である天孫にお返しせよという高皇産靈尊の言を伝えられるや、命は多年苦心して経営した国土を献上し、みずからは身に八坂瓊(やさかに)を負うて幽界に隠れ、天孫と国土との守護にあたることになった。

このような『神代卷』の記述は、儒学によって養われた合理主義的な立場から見れば、理解に苦しむところであるが、闇齋は忌部正通の『神代口訳』の中に「心神」という語を発見することによって、自己の神道説を大きく前進させることになったのである。「心神」なる語は、すでに『倭姫命世記』等に見える語であるが、これによって大己貴命の行動を説明する『神代卷口訳』は、闇齋に神と自己の魂との相関について、大きな解決の糸口を与えることになった。大己貴命の奇魂・幸魂、および八坂瓊は、忌部正通のいうところの「心神(心の神)」にはかならない。心神とはわが内なる天神(天の神)であつて、汚れた身心に天神は宿ることがないのである。もちろんこのような考え方は、朱子学の間論である「性即理」に理論的根拠を得ているが、闇齋にとつての天は、朱子のいう観念的・抽象的な理ではなく、あくまでも神であり、血脈相い通ずる父祖の世界であつた。闇齋はそのことを「天人唯一」とよび、天神とわが内なる天神(心神)との一貫性を理念としてではなく、わが身に即して理解(体認)することを目標とした。

關齋の神道、いわゆる垂加神道において、大己貴命の神徳を仰ぐこと特に深い理由は以上によって明らかである。しかも命に対する深い崇敬は、忌部正通や吉川惟足も説いておらず、全く關齋独自の識見であり特色であって、これが門流に伝えられていくのである。とりわけ孫弟子にあたる若林強齋の『神道大意』には、關齋の神道説が極めて明瞭に説き尽くされている。

(四) 『垂加草』の開板

正徳四年（一七二四年）に『垂加文集』七巻、翌五年に『統垂加文集』四巻が、江戸において跡部良顕および伴部安崇によって刊行された。これに刺激され、享保六年（一七二二年）に『垂加草全集』三十巻・附録二巻が、京においてとりわけ植田良背の尽力によって刊行されるに至った。両書はともに關齋の詩文集であるが、前者は關齋の詩文は一篇でも多く世に残さんとして、諸方より取り集めて合編したものである。後者は關齋がみずから厳選した手定稿本をもとにし、さらに天和三年（一六八三年）に刊行されていた關齋の讀書録『文会筆録』二十巻・十五冊を加えたものである。しかしこの『垂加草全集』が決して關齋の生前構想していた体裁に従うものではないことは、昭和五十六年に近江西依家で発見した關齋の自筆を含む一連の詩文の浄写原稿と比較することによって知ることができる。このことは關齋の思想の深淵が、従学久しかった直授門人にさえも窺い得なかったことを示すものである。

(四) 『風葉集』の完成と若林強齋

山崎關齋の垂加神道の結論を知るためには、『中臣赦』の注釈書である『中臣赦風水草』、『日本書紀・神代巻』の集註である『神代巻風葉集』の両書を読まねばならない。前書は關齋の晩年には完成していたが、後者は草稿のまま後に残されることになった。その『風葉集』は、『山崎關齋全集』に採録されているので容易に見ることができ、この書の成立の経過や体裁、内容について正確に論じたものは皆無に等しい。關齋の高弟正親町公通や晩年の弟子谷桑山等の言及が参考になるものの、相互の記述に異同が多く、山本信哉氏等の先学の研究も不十分なものであった。ところが山口春水筆録『強齋先生雑話筆記』の中に、『風葉集』の成立を考えるうえに決定的ともいえる記事があり、それによって考察を進めると、若林強齋は關齋の『風葉集』草稿を山本主馬（玉木正英に従学）より渡されて、整理完成するように依託されたことが知れる。この強齋考定本『風葉集』は、京都大学附属図書館に蔵されているこ

とがわかったので調査してみると、巻末に附せられている西依成斎および奥野寧斎の跋文によって、次のようなことが明らかになった。

闇斎の草稿本『風葉集』は、出雲路信直——玉木正英——山本主馬——若林強斎へと伝わり、強斎がこれを考定し、この考定本は強斎の学堂望楠軒に蔵されて、強斎の高弟西依成斎によって守られていたのである。それを成斎の弟子松坊順専が借りうけて書写し、その順専書写本をやはり成斎の弟子の奥野寧斎が借りうけて書写したのである。このことよって京大に伝わる写本は寧斎書写本であることが判明した。この寧斎書写本を『山崎闇斎全集』本および出雲寺家本（全集本と同じ）によって比較してみると、両者は体裁の面でも本文の面でもかなりにわたって異同があり、寧斎書写本は一見すると煩雑な感があるものの、闇斎の自著当初の面影を濃く伝えているのに対して、後者は成書として整然と統一のとれた形になっている。両書の比較の結果、強斎の考定本が先ず成り、これに改編を加えたものが今日容易に見ることができる全集本および出雲路家本であるということが明らかになった。改編を加えた人物は誰であるか。それは『神代巻記録』の改変者と同一人物の玉木正英その人であろう。正英が手を加えた『神代巻藻塩草』、強斎考定本『神代巻風葉集』、出雲路家本『神代巻風葉集』の三者の異同を詳しく見ていくと、正英の取捨の跡を明らかにすることができる。正英は『風葉集』の事実上の完成者若林強斎の用意工夫を一掃し、あまつさえ闇斎の神道説にまで取捨改変を加えたのである。

### 三

本書『山崎闇斎の研究』（昭和六十一年、神道史学会）は、すでに刊行されている『浅見綱斎の研究』（昭和四十五年、同上）・『若林強斎の研究』（昭和五十四年、同上）とあわせて、崎門学の研究の三部作をなすものである。この一連の著作の眼目は第一作のはしがきに、「終戦とともに、崎門の学問は超国家主義の思想であると断ぜられ、闇斎・綱斎・強斎等の先学の名をいう者は、殆ど影を潜めた。今こそ私は、内田（遠湖）先生の志を継ぎ、諸先学の学問を明らかにせねばならぬと、ひそかに決している」と記されている通りである。昭和十八年十二月一日に入宮された著者が常に携

行して手放すことがなかったのは、綱齋の代表的著作『靖献遺言』であった。復員後の著者は遠湖翁の遺志を継いで綱齋文集の校定にあたり、それが綱齋研究の出発点となったのである。『浅見綱齋の研究』を上梓してから、次に強齋について筆を執られたのは、第二作のはしがきに、「闇齋先生に復帰することを念願とし、綱齋を唯一の師と仰ぎつつも、辛苦困学、ついに師が果し得なかった闇齋学の本質の究明を成し遂げ、それを最も純粹簡明に門下に伝えた強齋の、その人物の学問を明らかにすることは、闇齋先生を学ばんとする者が、何としても通らねばならぬ関門であると思う」とあることから窺い得る。闇齋の残した文献は膨大なもので、それは五種類に分けることができる。嘉点『四書集註』・同『近思録』等の校刻訓点書、『闢異』・『中和集説』等の編纂書（朱子やその他の儒者の語を抄出したもの）、『白鹿洞書院掲示』・『仁説』等の表章書（『白鹿洞書院掲示』は、『朱子文集』巻七十四より採録し、これに最小限の註解を加えている）、『文会筆録』・『中臣被風水草』・『神代卷風葉集』等の著書、『神代卷記録』・『大学垂加先生講義』等の講説書がそうである。儒教における代表的著作『文会筆録』は闇齋の読書劄記ともいうべきもので、ほとんど広汎な書籍の引用で埋め尽くされており、必要に応じて最小限度の意見を付け加えただけである。これは神道における代表的著作『風水草』・『風葉集』においても同様である。そのため残された文献から闇齋の思想を取り出すのは極めてむづかしいものがある。闇齋の場合、高弟の筆録した講説書の現存するものが極めて少ないのも、一層その思想理解を困難にしている。ここにおいて朱子学の面では綱齋の講説書、神道の面では強齋の講説書を媒介にして闇齋の思想を窺い得るといっても過言ではない。その意味において、著書の第一作・第二作はまさしく第三作の序にあるように、「この間に私は、『浅見綱齋の研究』・『若林強齋の研究』を刊したが、それは『山崎闇齋の研究』の完成を目標とし、そのための用意であり準備であった」ということができるのである。以上のような準備のもとに著書は、校刻訓点書・編纂書・表章書・著書・講説書のすべてにわたって、書誌学的な調査を積み重ねたうえで、闇齋思想の本質を究明しようとされたのである。

本書第一部は十六篇の論文で構成されており、内容についての大体はすでに紹介したところであるが、なかでも書誌学的な調査の厳密を極めたものは、「嘉点『論語集註』の研究」と「『風葉集』の完成と若林強齋」とであり、思想的な論考の精密を尽くしたものは、「易学と山崎闇齋」と「心神考——三輪大神と山崎闇齋——」とであろう。と

りわけ「心神考」は、著者の長年にわたつての調査研究、思索体験が融合結晶して成つたものであり、深い感銘を与える。この論文において読者は闡齋思想（垂加神道）の本質を知り得るであらう。そのことについては本書の序に、「その思想の転回がいかに激烈であつても、その転回の軸として必ず不動の先生自体が存しているはずである。然らばそれはどのようなものであつたか。私の思索はこの一事の究明に凝固するに至つたが、それを求めて漸く求め得たのは、先生が始終孝子であつたことであつた。孝こそ先生の本質である」と述べられているが、この孝が単に儒教的倫理にとどまるものでないことは、「心神考」の冒頭に、「昔から闡齋が仏教 儒教 神道と思想遍歴したことをいろいろ問題にしているが、これは真実の道を求めてやまなかつたことからの必然であつた。道とは自己の魂の依拠である。さればそれは、生死を越えて永遠に帰一するものでなければならぬ。ここにおいて問題は、当然、神と自己の魂との相関にかかつて」と説明されていることと深い関係を有している。闡齋は父母と吾とを一貫する「いのち」を自覚し、吾が身を慎しんで父母への孝養を尽くすことにとつめたのであるが、父母に対するのと同じように、天を吾が父母とし、これを血脈的存在としてとらえ、深い畏敬の念を抱いた。闡齋にとつての天は朱子のいうような抽象的な理ではなく、現在の吾と血脈相い通ずる靈的な父母の世界、すなわち神の世界（高天原）であつた。そのような神と自己との相関を端的に表現する語が「心神」であり、闡齋は吾が内なる天神を心神とよんだのである。このような宗教的自覚のもとに、神と自己の魂との相関は、天人唯一・神代即人代とされるに至つたのである。だから闡齋にとつて、双親に孝養を尽くすことと天神に敬を尽くすことは一体不二であり、自己の精神は生死を越えて永遠に「いのち」の中に生きることになる。以上が著者の求め得た闡齋思想の本質である。

枚数の都合上で第二部にまで及び得なかつたが、「楠本碩水」・「平泉博士と山崎闡齋」の両論文において、著者の師承関係が詳しく述べられている。なお著者は三部作研究の過程において集録された若林強齋、山崎闡齋の神道説を校訂整理し、それぞれに刊行しておられる。強齋のものは、昭和五十三年発行『垂加神道（上）』（『神道大系』論説編十三）および闡齋のものは、昭和五十九年発行『垂加神道（上）』（『神道大系』論説編十三）および闡齋のものは、昭和五十九年発行『垂加神道（上）』（『神道大系』論説編十三）がそうである。最後に附言したいことは、本書について神道研究の専者から、儒教の面に重点が置かれすぎているのではないかという異論が出るかもしれぬが、「緒説」の結びを引用してそれに答えたいと思う。

「私が修めて来た崎門学は、内田翁より継承した朱子学を主体とする。本書が關齋の儒学と、儒学よりする神道について述べることを厚くして、垂加靈社の問題、『風水草』・『風葉集』の問題等、神道の眼目についてほとんど述べるところなきことの未熟は、私自身が最もよく承知しているのであるが、筆を執るべくして力及ばぬ故と寛恕していただきたい」。

※なお『日本』新年号に倉田藤五郎氏の書評（執筆は昭和六十一年九月十三日）が掲載されている。

一九八六年（昭和六十一年）七月二十日発行 神道史学会 八五〇〇円